

【分科会 22】あなたはあなたの人生の主人公 ～仕事に活かした長所と配慮について学ぼう～

中原さとみ、飯野雄治、渥美正明、岡本さやか、中村孝、大平学、川人洋子(リカバリーキャラバン隊)

やったこと

- ① 精神疾患がある方たちがリカバリーしていく様子を写真と文字でまとめたリカバリームービーを上映しました。
- ② 精神疾患があっても、援助の仕方次第では働ける(IPS の話)、働くためには長所の活用が必要(ストレンクスモデル)、長所を活かしていると充実感が得られる(リカバリー)、障害があると長所が隠れやすい(エンパワメント)、障害をどかすには配慮が必要(合理的配慮)、配慮は求めないと得られない(セルフアドボケート)ということを分かりやすく説明しました。
- ③ 参加者が 2 人 1 組になって、お互いの魅力と可能性を探し合う体験を 30 分やりました。

分科会に参加いただいた方で、支援者として活動されながら、自らも精神的困難を経験されたこともある方に当日の様子について記述いただきました。

＜参加感想＞ 斜め 45° の関係から生まれるリカバリー、それはリカバリーという名のディスカバリーなのだ！

人生は腹八分、小池洋介 (社会福祉士)

本分科会ではリカバリー、ストレンクスモデル、エンパワメントそして I P S の説明を通して「精神疾患があっても働けるんだ」ということを講義・スライド・ワークショップを用い、丁寧に落とし込んでいくものでした。支援者、専門家が諸手を振って、リカバリー、ストレンクス、I P S 善しと論ずるのではなく、実際にその視座に立ち、利用し、経験し、今を生きているキャラバン隊メンバーさんたちが、ファシリテーターである中原さん・飯野さんとともに登壇し、笑いあり、涙あり、ツッコミあり、ギャグもあり…で進めて下さったことに、一番のリカバリーへのエビデンス、エッセンスを感じる事ができたと思います。

成功を収めてしまって、手の届かないような人の話をありがたく傾聴するのではなく、ふと手を伸ばしたら届きそうな、自分にもリカバリーできるかも、何かやってみようかな、話してみようかなと思わせてくれる関係。そうつまり、対称でも非対称でもない、90°でも0°でもない、ほどよく「斜め 45°にある関係」から生まれるリカバリーの要素を本分科会から感じました。殊にキャラバン隊メンバーの岡本さやかさんの「どんなに遅咲きの桜でも、咲かない桜の花はない」の言葉には、誰もが頷きながら、また目頭を押さえる人の光景が会場に散見していたのが印象的でした。

「精神疾患があっても働ける」それは一見、聞こえのいい言葉かもしれませんが。ともすれば倫理、道徳的な言葉として一人歩きしているかもしれません。しかし、それは奇跡でも偶然でもなく、本分科会のタイトルにもあるように「自分の人生の主人公は自分である」ということを再確認し、視点を変更し、多様な文脈を生きる「自分という物語を愛し愛されること」から始まるのかもしれないことに、気づかせてもらえる貴重な時間でした。

また I P S に関して「当事者が運転席、支援者が助手席に乗っているようなもの」という言葉がありました。それはリカバリーへのドライブ旅行のようなものであり、運転手を信じ、時に道に潜む障害物を一緒にのけ、景色を楽しむこと。つまり「リカバリーとはディスカバリー (宇宙冒険、大発見)」なんだと感じました。もしかすると数年後には、どこかマイナスからスタートする要素が漂う「リカバリー」という言葉が「ディスカバリー」へと進化し、「あなたディスカバリーしてるね!」「ディスカバリー全国フォーラム 20XX 年」「ディスカバリーキャラバン隊」になっているかも? 何か格好よくないですか? (笑) _

《中原さとみ(リカバリーキャラバン隊)》